

大学生活のための衣服準備を通してみる 学生らしさのアイデンティティ —— 本学学生を主な対象者として ——

絲 原 郁 子
(被服造形学研究室)

A Study on College Student Identity Seen through the Choice of Clothes for College Life
—— Mainly Based on a Survey Conducted on Students
of Shimane Women's Junior College ——

Ikuko ITOHARA

キーワード：大学生活の充実 (fullness of college life), 衣服の観察 (observation of clothes),
アイデンティティ (identity), 自律から自立へ (from autonomy to independence),
学生らしさ (college student's suitability)

1. 問題の所在

大学・短大への志願率が50%を超えた現在, 入学する学生の資質のバラツキは大きく, 学習活動, サークル活動等, 大学生活への適応性の問題が生じており, ことに大学生としての目的意識の希薄化が目立つようになった。その結果として, 教員らは勉学意欲を高める以前の問題に対処するために時間を費やすことが多い現状である。また, これら学生の整容面の変化は, 学生生活の内実と相通じていることが多い。すなわち入学時の学生は, 高校までの生活全般にわたる従属意識から進学を期に将来の方向性を決定し, 独立意識が高まる時である。大学キャンパス内での衣服生活はこうした学生の内面的アイデンティティを表現していると思われる。入学から1ヶ月余りのこの時期の学生は『自立への自覚と恐れ』

や『自分らしさの追求』, 『将来選択への不安』などによる葛藤から適応不能を起こす者も見られるが, 少し落ち着き勉学に向かう時期でもあり, 内面の別表現としての衣服生活も安定化が認められる。

このように衣服生活が学生生活において身近な自己表現手段であることから, 服装面から学生らしさについて検討することは学生生活指導面, また学生の自立面への足がかりとなり得ると考える。これまでの衣服面から学生を捉えた研究は, 佐野らによる新入学時の意識調査分析研究^{1,2)}, また, 富田らによる「衣服行動」から捉えた研究^{3,4)}がみられる。しかし意識面と表現面の両面から学生の行動を捉えた研究は見当たらない。生活環境の激変に伴う精神的・身体的ターニングポイントとなるこの時期の学生の意識構造を分析することは, 学生指導, 衣服教育を

進める上からも意義深いものであると思われる。

2. 研究の目的と方法

1) 研究の目的

生活全般に関わる情報の氾濫する中で、『どのように大学生活に適応していくのか』そのプロセスを衣服生活から捉え、衣服教育、学生指導のあり方を検討することを目的とする。被調査者は将来の方向性の比較的明確な専攻生と、学生生活を楽しむ気持ちの勝る専攻生である。

2) 分析の方法と学生意識構造の概念

(1) 構造概念モデルの設定

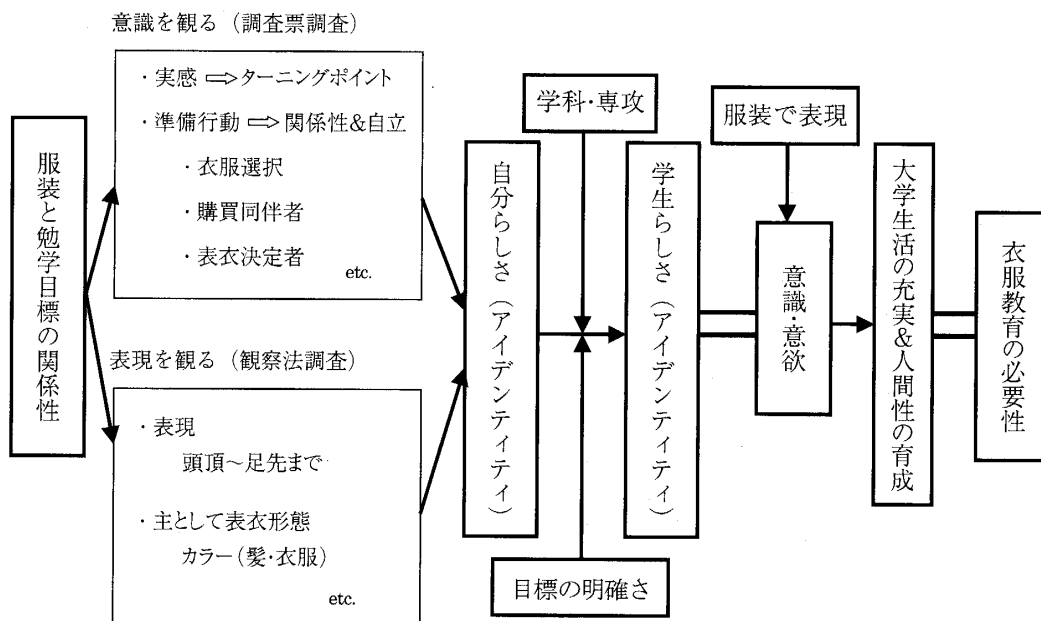
「整容と勉学意欲の関連性」についての概念構造は第1図に示す通りである。服装と勉学目標の関連性は、調査票調査による「意識面」と観察法調査による「表現面」の両面から捉え、学生の「自分らしさのアイデンティティ」を探る。「学科・専攻」および「目標の明確さ」などを要素として更に検討を加えて、「学生らしさのアイデンティティ」を検証する。このことは観察法により、衣服を中心とした全身を分析することで意識、意欲が認められると考える。これは大学生活の充実や人間性の育成にもつながると考える。衣服生活行動は、自己内面を最も端的に現すものであり、衣服教育の重要性の一つがここに存在すると思われる。

(2) 衣服購買行動と自立意識の関連性

大学生の自立意識は、大学生活の充実や人間性の育成と関連していることから、表衣類の購買行動と着衣額との関連性を第2図に示すような自立の捉え方を設定した。タテ軸の総表衣額は、調査票調査結果に基づき表衣の組み合わせが比較的多くみられる服種のパターンを数種類⁵⁾選び、日本衣料管理協会の「衣料の使用実態調査」報告書中の学生衣料品価格表に準拠して最高値と最低値を決め、中位額は本調査の総表衣額の度数分布から4段階決めた。ヨコ軸は衣生活面の自立度として高校時代の表衣類の購買行動を「親任せ」、「親と本人」、「全て自分」に分けた。これらのクロスセッションの各セルを「(S) 学生らしさ」領域、「(Indi.) 無関心」領域、「(Fro.) 質素」領域、「(Self) 自分らしさ」領域、「(E) 贅沢」領域、「(E+O) 贅沢で他人任せ」領域、「(Auto.) 自律 (Autonomy)」領域、「(Inde.) 自立 (Independence)」領域と設定した。

3) 対象者と調査時期

対象者は本学保育科、家政科生活科学専攻の1年生と2年生(以下保育1、保育2、生活1、生活2)および農学部生物資源環境学科1年生(以下4生資1)の女子学生である。調査時期は本年4月下旬から5月上旬の1週間である。なお、短大生は同日同時間に予告無しの悉皆調査である。有効回収率は



第1図 整容と勉学意欲の関連性

98% (197人) であった。

3. 結果および考察

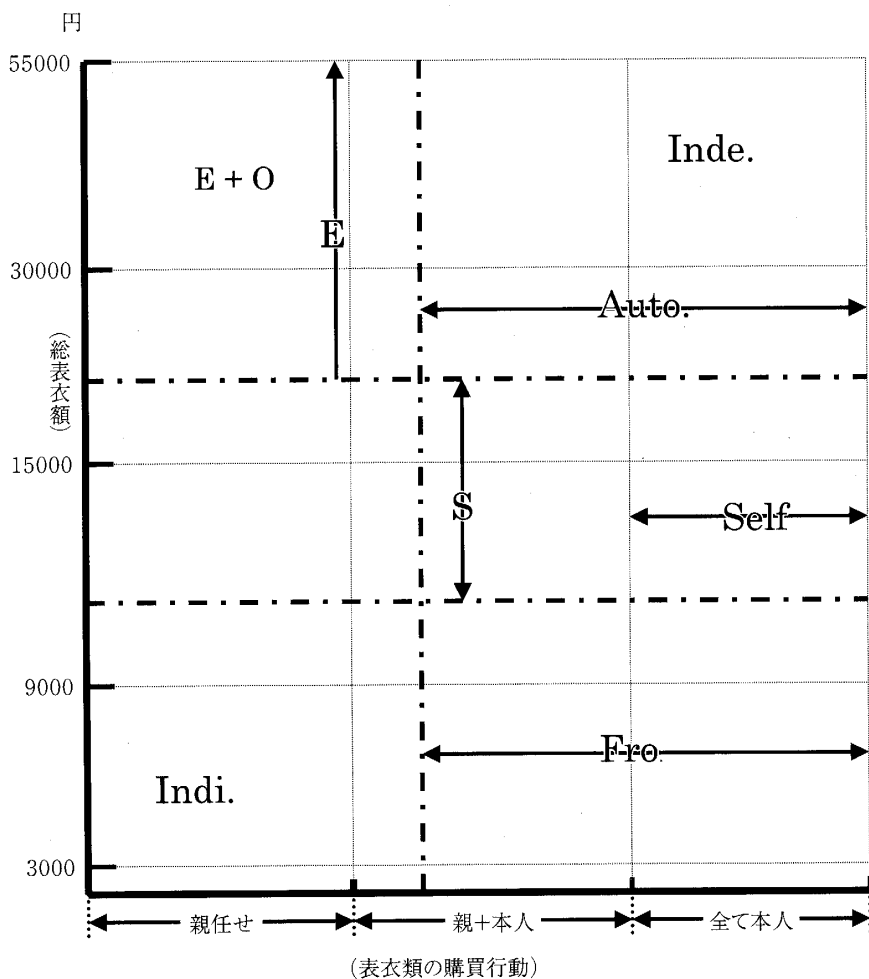
1) 衣服生活意識と自分らしさの関係

衣服行動における「大学生を実感する」場面につ

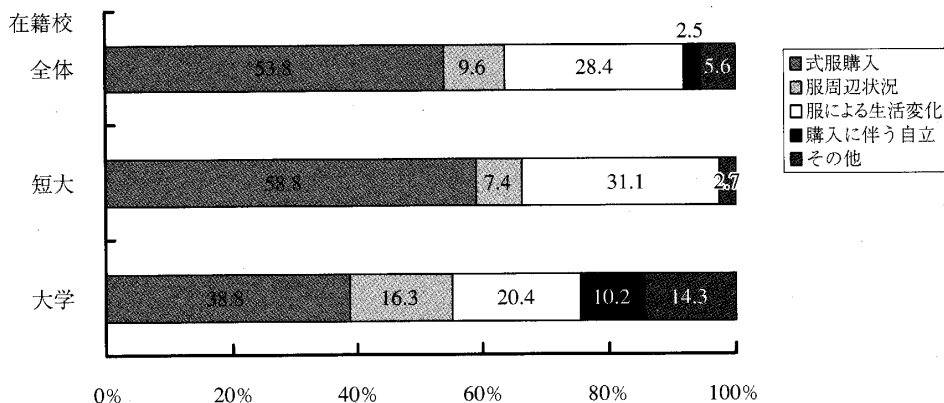
いては、第3図に示す通りである。実感する場面を「服の種類が増えた時」や「服の枚数が増えた時」などを「服周辺状況」, 「毎日自分でコーディネートするようになった時」や「服の組み合わせに迷った時」, 「試着している時」などを「服による生活変化」,

「自分で購入するようになった時」を「購入に伴う自立」, 「式服を購入したとき」を「式服購入」とし、4カテゴリーから捉えてみると、全体では「式服購入」が53.8%「服による生活変化」はこれの1/2である。このことから半数の学生が入学式用の衣服を購入した時、大学生になったと実感し、この時点が高校生から大学生へのターニングポイントといえる。つぎに短大生と四大生を比較すると、短大生の「式服購入」が4大生より20ポイント多く、短大生がより一層強く実感していることがわかる。また、「服による生活の変化」でも短大生が11ポイント多い。しかし「服周辺状況」では4大生が8.9ポイント多い。これは短大生が4大生より「式服購入」や「服による生活変化」という体感することで実感する傾向が強いことを示していると思われる。

また、専攻別にみると第4図



第2図 衣服生活と自立の関係から捉える学生らしさ



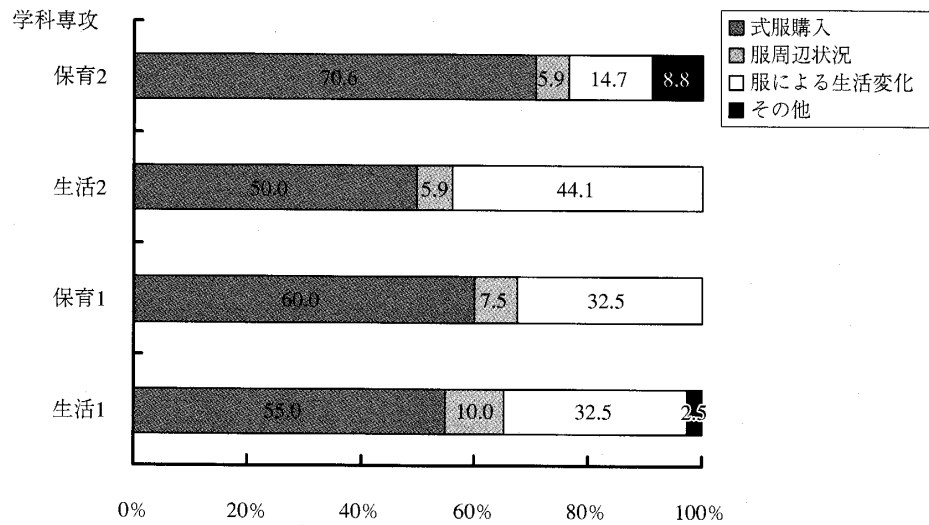
第3図 衣服行動からみた大学生を自覚する時

に示す通りである。「式服購入」がいずれの専攻でも過半数を占めるが、保育科が生活科学専攻より5ポイントから20ポイント大きいことがわかる。ただ生活2の「服による生活変化」が他に比べ12ポイント大きい。これは入学時というより現在の気持ちの現れと思われる。

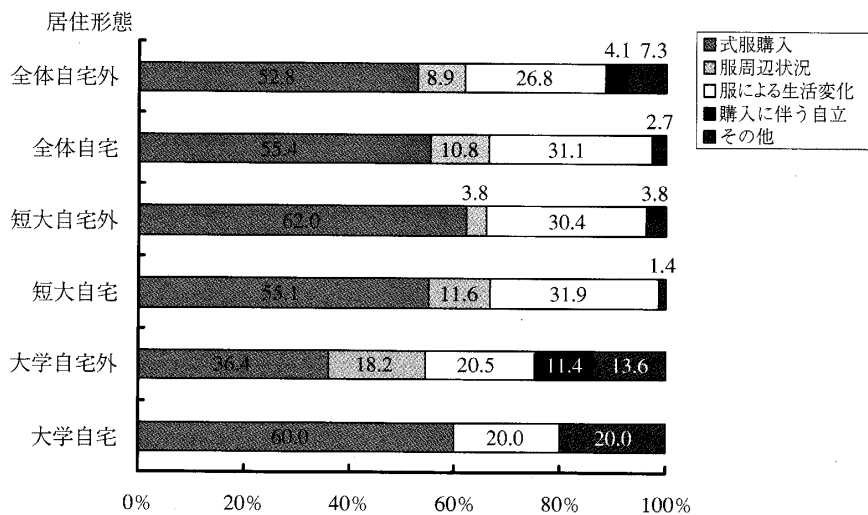
また、居住形態別にみると、第5図に示す通りである。短大生は「式服購入」で実感した者のうち、自宅外の学生は自宅通学生より7ポイント多い。「服周辺状況」、「服による生活変化」は自宅、自宅外とも同程度である。また、4大生は「式服購入」で実感したものは自宅通学生が60%と、自宅外の学生より20ポイント多い。しかし自宅外の通学生では「服周辺状況」18.2%、「服による生活変化」20.5%、「購入に伴う自立」11.4%が他の要素より高く、家族との別居という生活環境の変化が良く現れていると思われる。

2) 実感項目と購入同伴者について

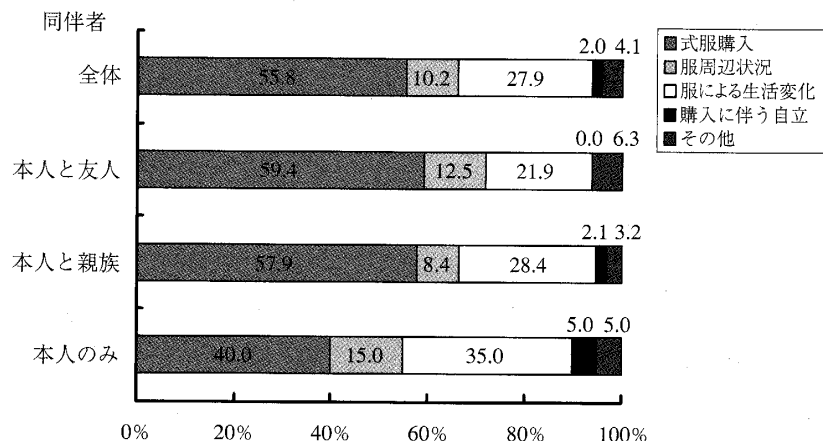
「実感」項目と「決定者は本人」であるが、購入する時の同伴者については第6図に示す通りである。全体では、「式服購入」は、同伴者が「本人と親族」や「本人と友人」の者が6割近くを示し、本人1人で行く者と約20ポイントの差が認められる。「服による生活変



第4図 衣服行動からみた大学生を自覚する時



第5図 製容面からみた大学生実感と居住形態



第6図 整容面からの大学生実感と衣服購入同伴者 (本人決定)

化」では、同伴者が「本人のみ」「本人と親族」「本人と友人」の順に6.5ポイントの差が生じた。式服のようなフォーマルで比較的高価で長期使用するものは、購入に際して慎重に行動するためと祝意から親以外に祖父母などが同伴者となる場合が多く、日常着である通学服などは比較的安価なため本人が好みの服を購入していることを示す結果と思われる。

つぎに「購入決定者」が親族の場合について、短大生と4大生で比較してみると第7図の通りである。「購入に伴う自立」や「人と違う服装」、「季節」、「目立ちたい」などを「その他」としたが、ほ

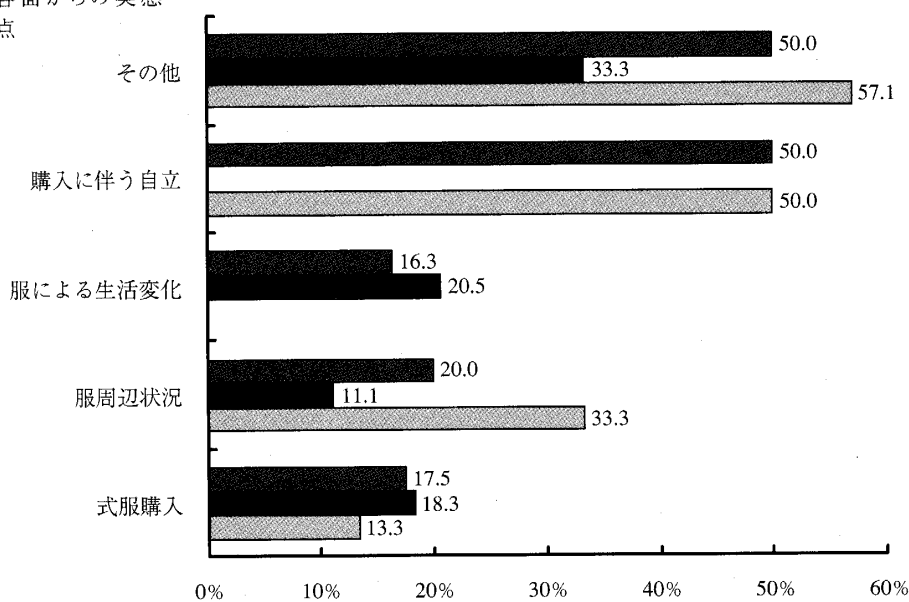
ぼ半数存在する。ことに4大生にその傾向が認められる。短大生に「購入に伴う自立」はみられない。これらより購入の際、大学生になったお祝いの意味で祖父母など親族を同伴し、周りの人たちから大学生になったという意識を与えられて実感していくパターンと思われる。またこの親族の中には年上と思われる兄弟姉妹が約1/3みられることから、最も身近で年の近い兄弟に相談していると思われる。

「購入時の同伴者」を居住形態の違いからみると第8図に示す通りである。短大生、4大生ともに「本人と親族」の者が過半数を占めている。短大生は

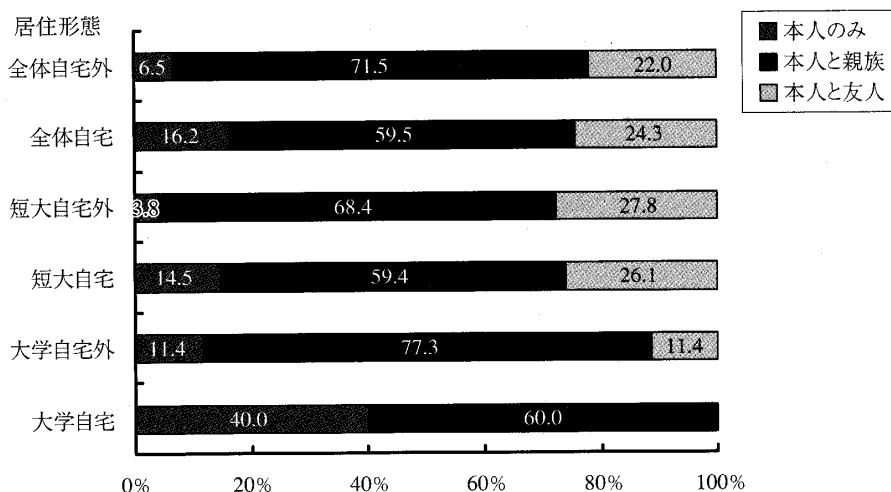
「本人と親族」と答えた者のうち自宅外の学生は自宅通学生より9ポイント多く、68.4%である。「本人のみ」、「本人と友人」の者は同程度である。4大生は「親族同伴」の者は自宅外の学生が77.3%と自宅通学生より17ポイント多く、「本人のみ」と「本人と友人」の者が11.4%ずつである。自宅通学生は「本人のみ」の者が40%存在するが、「本人と友人」の者は皆無である。

また「購入決定者」を居住形態別にみると第9図に示す通りである。短大生、4大生とも居住形態にかかわらず購入時の

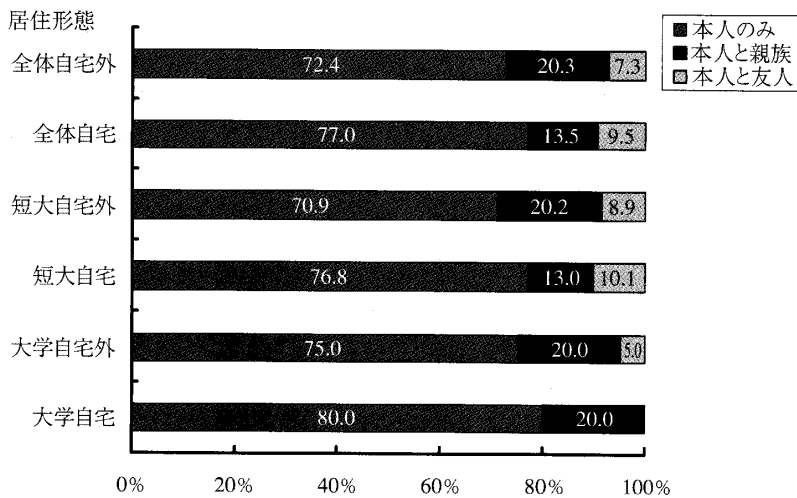
整容面からの実感
時点



第7図 整容面からの同伴購入行動による大学生実感（親族決定）



第8図 居住形態からみた服購入時の同伴者



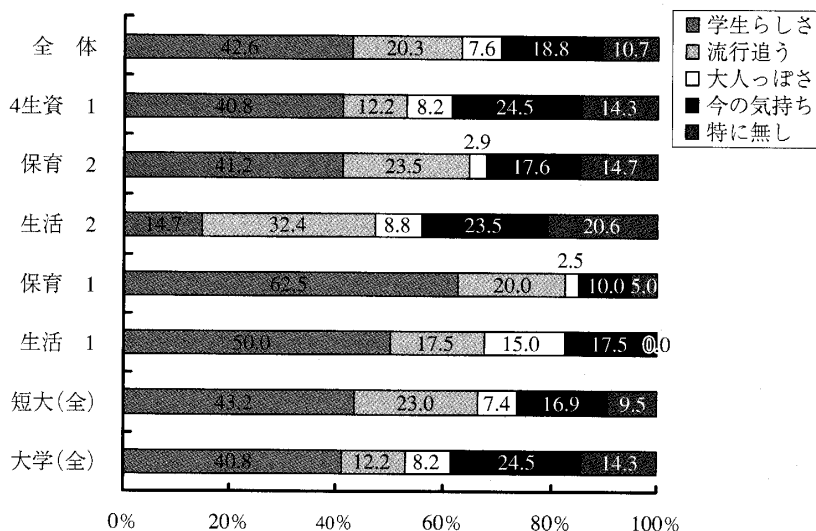
第9図 居住形態からみた服購入時の決定者

決定は「本人のみ」の者が70%以上、次いで「本人と親族」である。

これらより購入時には多くの者が親族同伴で行動し、身近な理解者である親族にアドバイスを求め、決定には本人の意志が強く働いていることが示された。

3) 通学時の服装と学生らしさ

大学通学時「服装に配慮している点」については第10図に示す通りである。「学生らしさ」は短大生と4大生共に4割を占める。短大生は「流行を追う」が4大生より11ポイント多く、流行に敏感なことがわかる。しかし4大生は「今の気持ち」が7.6ポイ



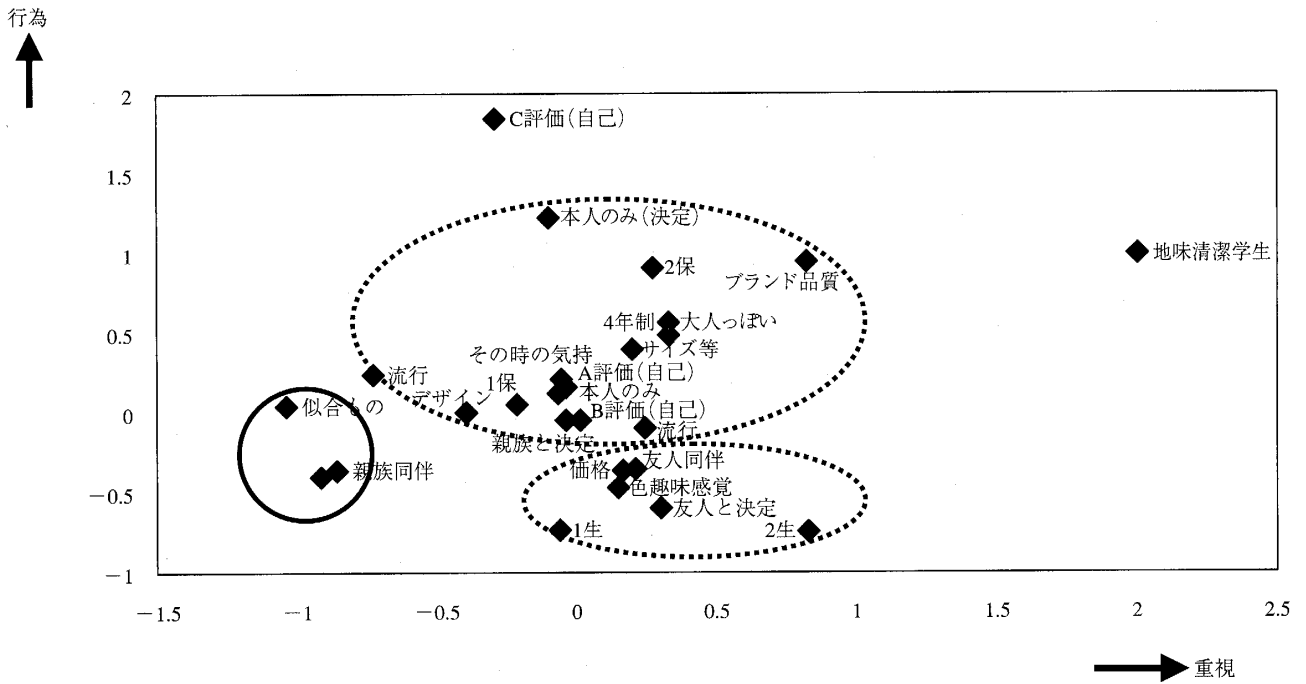
第10図 整容面からみた通学時の服装への配慮点

ント多く、短大生と4大生の気質の違いが現れていると思われる。専攻別では生活2を除いて「学生らしさ」が最も多く、ついで「流行を追う」「今の気持ち」の順である。生活2は「流行を追う」32.4%、次いで「今の気持ち」「学生らしさ」となり、生活科学専攻では被服教育が行われていることに加え、平素より服装に対する関心度が他の専攻に比べ強く、ファッション性豊かに学生生活を楽しんでいる様子が示された。生活1、保育1はともに「学生らしさ」がそれぞれ50%、62.5%と過半数を占め、新大学生としての初々しさが示された。

4) 整容面から捉えた服装に対する意識と評価の関係

整容面から捉えた服装に対する意識と評価の関係をみるため数量化IV類により分析した結果は、第11図に示す通りである。大学通学時の「服装の配慮点」「購入時の同伴者」「購入決定者」「購入のポイント」「自己評価 (調査時点の総表衣の被調査者による自己評価をA評価80~100点, B評価51~79点, C評価0~50点として表記)」の項目と学科・専攻の類似性をみると二つのグループ化が認められた。一つは大学生生活を享楽傾向性の学生が多い生活1、生活2のグループで、衣服の「購入時の同伴者」は「本人と友人」, 「購入決定者」も「本人と友人」, 「購入のポイント」は価格, 色, 趣味感覚に合うものを選択などがその周辺に集まった。他の一つは専門性が強く目的意識の明確な保育1, 保育2, 4生資1のグループで周辺には、通学時の「服装の配慮点」はその時の気分, 衣服の「購入時の同伴者」は「本人のみ」, 「購入決定者」は「本人のみ」と「本人と親族」の者, 「購入のポイント」は流行, デザイン, サイズ, 「自己評価」の「A評価」, 「B評価」などが集まった。

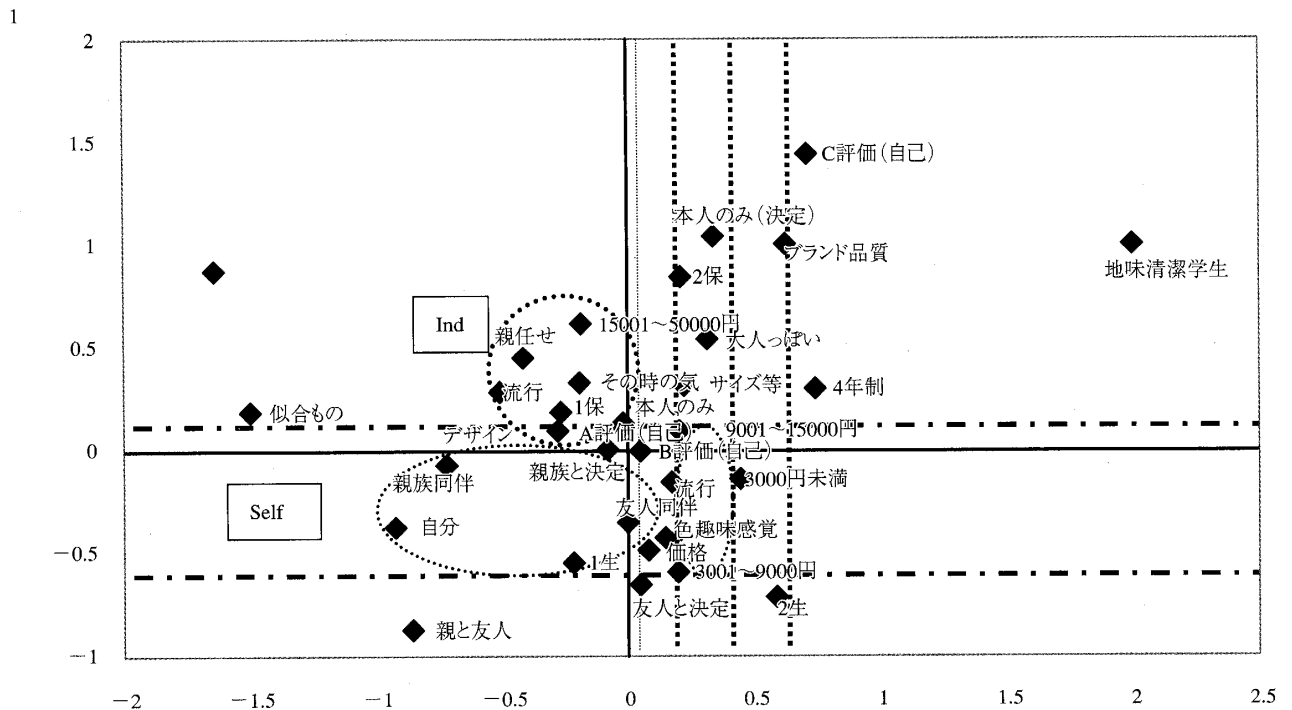
これらより、目標が明確であると



第11図 整容面から捉えた服装に対する意識と評価の関係

いう学科の特徴が学生の整容面に明確に二極化として現れた。

5) 整容面から捉える自立について
整容面から捉えた自立度を学生らしさの概念図(第2図)に当てはめてみると第12図の通りである。



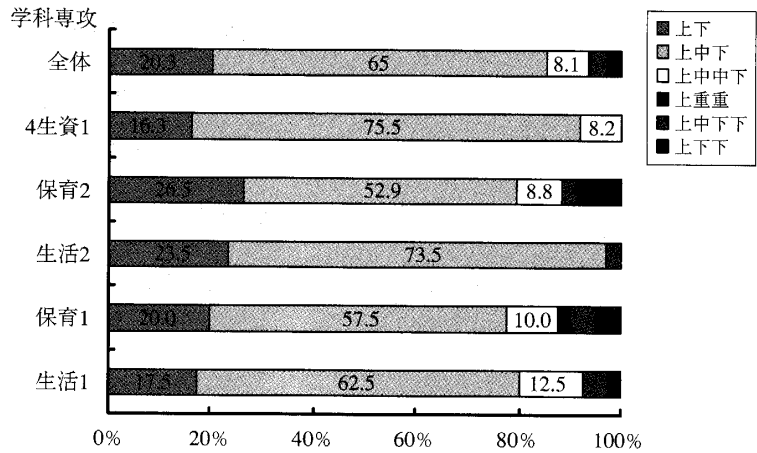
第12図 整容面から捉えた自立

タテ、ヨコの線を前述の第2図に習って準拠したものである。タテの破線内は「学生らしさ」領域、ヨコの波線内は「自分らしさ」領域である。「親と本人」、「自分」領域が概念図と逆の構図となったが全体にはよく対応している。すなわち、保育1は通学服に「流行を追う」「その時の気分」および「自己評価」の「A評価」が周辺に存在する「親任せで無関心かつ贅沢」領域に存在する。保育2は、「学生らしいが親任せ」、4生資1は「親任せでやや無関心」領域に存在する。専門性の明確な専攻の学生は表衣類に無関心ではないが親に依存する姿が認められる。生活1は衣服の「購入時の同伴者」は、「本人と親族」、「本人と友人」などが周辺に集まり、生活2は「自分らしさ」領域に存在し、ここでも大学生活に対し享乐傾向性の強い学生が多い専攻と専門性が強く目的意識が明確な学生との違いが認められた。

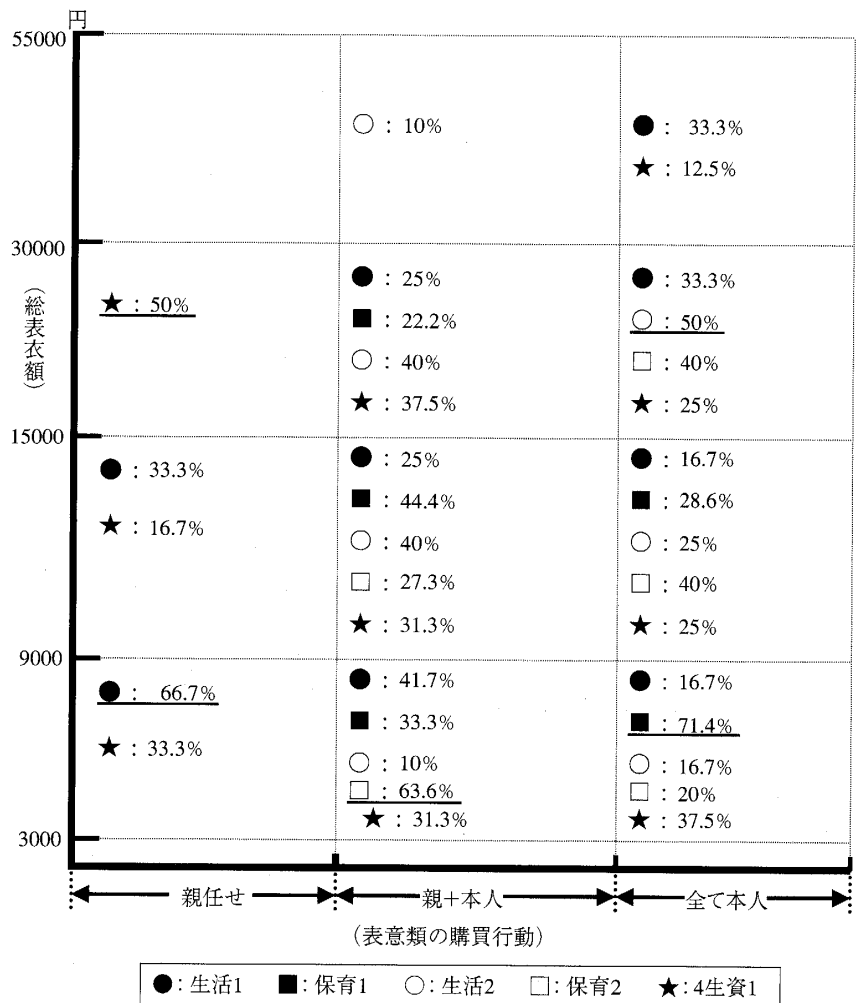
6) 「表現」から捉える自分らしさ、学生らしさ^{6,7)}

観察法調査による全身の表現、とくに服装表現から「意識や意欲」について観る。表衣の重ね着の状態を学科・専攻別に調べた。結果は第13図に示す通りである。(図中の「上衣・下衣」の組み合わせは「上下」, 「上衣・中衣・下衣」の組み合わせは「上中下」, 「上衣・中衣・中衣・下衣」の組み合わせは「上中中下」, 「上衣・中衣・中衣・下衣・下衣」の組み合わせは「上重重」, 「上衣・中衣・下衣・下衣」の組み合わせは「上中下下」, 「上衣・下衣・下衣」の組み合わせは「上下下」とする) 全学科・専攻とも「上衣・中衣・下衣」の組み合わせが最も多く過半数を占めている。そこで、この「上衣・中衣・下衣」

の組み合わせを今調査の代表的な表衣組み合わせと捉え、これを学科・専攻別に表衣類の購買行動と総表衣額の関係から観る。第14図は10%以上示すもの



第13図 観察からみた表衣の重ね着の状態



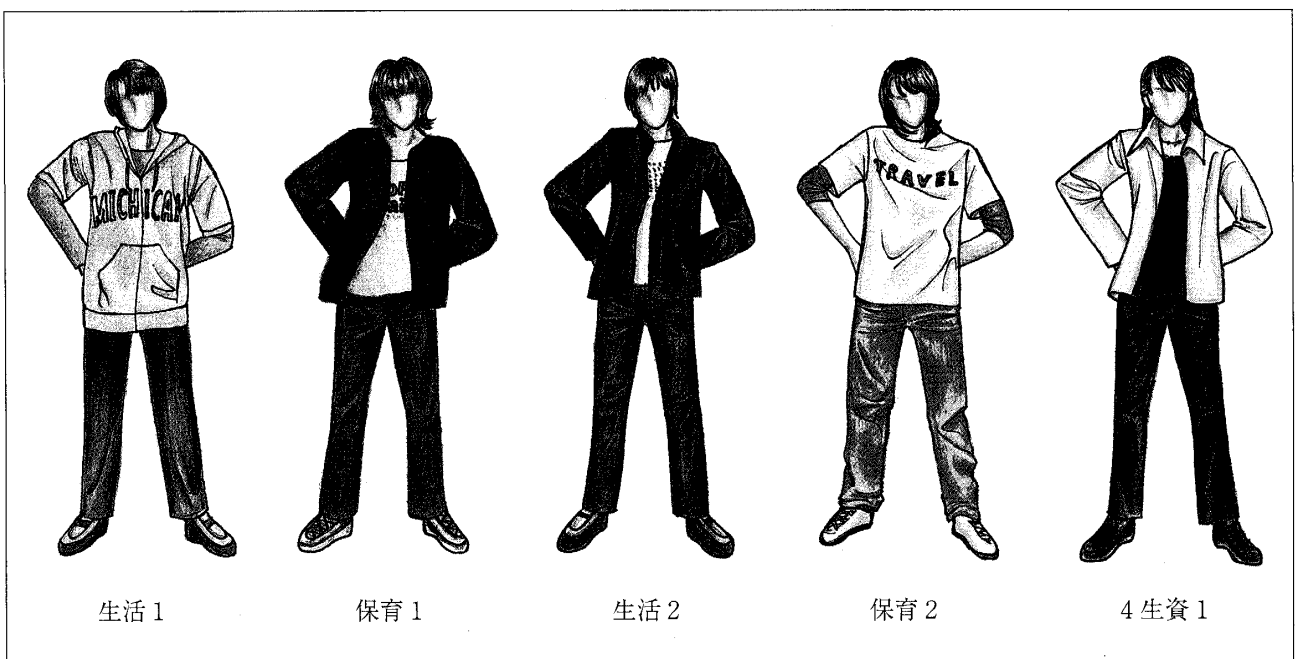
第14図 衣服生活と自立の関係から捉える学生らしさ

を学生らしさの概念図にプロットしたものである。

生活1は、「親任せで無関心」領域が66.7%と多く、他に「自律していて質素」領域、「自立していて学生らしい」領域「自立していてやや贅沢」領域に存在する。生活2は「自立していて学生らしいがやや贅沢」領域が50%、「自律していて学生らしい」領域と「自律していて学生らしいがやや贅沢」領域に各40%と分散した。これは調査票調査と比較的類似した結果である。保育1は「自立していて質素」領域71.4%と、「自律していて学生らしい」領域および「自律していて質素」領域に存在する。保育2は「自律していて質素」領域63.6%、「自立していて学生らしい」領域と「自立していて学生らしいがやや贅沢」領域に各40%存在する。これらは自立面において調査票調査とは異なり、Autonomy（自律）からIndependence（自立）領域へと学生の内面転換プロセスを示す結果である。4生資1は「親任せでやや贅沢だが学生らしい」領域50%、次いで「自律していて学生らしいがやや贅沢」領域である。自立面では保育1、2と同じだが、総表衣額はやや贅沢を示す。また「親任せ」領域は生活1と4生資1が存在する。保育1、2は総表衣額に差はあるものの、1、2とも「自律から自立」領域に存在し、保育1はやや自律型、保育2は自立型とこの1年間に大きく内面的成長していく姿が認められる。

このように観察法から捉えると、専門性が明確な学科・専攻でも個人差がみられ、学生が一律でないこと、短大生と4大生の違いも認められる。また「自律していて贅沢」領域に、生活1は33.3%、生活2が10%存在するが、大学生生活を楽しみ目的意識のやや乏しい専攻の特徴が示されたものと思われる。調査票調査と写真による観察法調査とで結果に多少の違いがみられるが、「意識と表現」から捉えた整容面における学科・専攻の違いは全体的にはよく対応している。

最大値を示す下線部に属する学生の平均像をスタイル画で現すと、第15図に示す通りである。生活1は、ヘアカラーは無く、上衣はトレーナー、中衣はTシャツ、下衣はブルージーンズ、履物はスニーカーというスタイルがほとんどで、少しくすんだ色の取り合わせである。保育1は、ヘアカラー無し、上衣はカーディガン、中衣はTシャツ、下衣はブルージーンズ、履物はスニーカー、無彩色系のくすんだ色の取り合わせである。生活2は、ヘアカラーが多く、上衣はジャケット、中衣はTシャツ、下衣はパンツ、履物はスニーカーの組み合わせで、色は無彩色系である。保育2は、ヘアカラーほとんど無く、上衣はTシャツ、中衣はTシャツ、下衣はストーンウォッシュジーンズ、履物はスニーカーの組み合わせで、色は他の専攻より少し明るめである。4生



第15図 観察法でみた学生の平均的スタイル

資1は、ヘアカラーは無く、上衣はジャケット、中衣はTシャツ、下衣はパンツ、履物はスニーカーの組み合わせで、無彩色系の者が多くみられる。保育2,生活1のスタイルは特異的であるが生活2,保育1,4生資1は非常に類似性を有する。

重ね着の状態に関係なく全体をみると、上衣の服種と質感が異なるものの中衣、下衣はTシャツ、ジーパンの組み合わせが多く、色は無彩色系、履物はスニーカーが大多数である。これは第10図の示すように通学服に気を配っている点に「学生らしさ」を選択した者が多く、「学生らしさ」イコール清潔感・動きやすい・地味で目立たないようにするという内面の現れと思われる。特異な例としては第13図に観るように短大生の中に流行を取り入れた下衣の重ね着スタイル（パンツ類の上にスカートを着用する）が少人数存在した。

4. ま と め

「大学生」を実感するのは『式服を購入する時』で式服購入とそのための購買行動は家庭のイベントであり、周辺からの祝意を込めた共同の行為により、学生の意識上の大学生としての自覚をもつターニングポイントになっている。また、購買行動には居住形態に関係なく、ほとんどの場合親族が同伴し、決定に際しては本人の意志が重んじられていることもわかった。日常着には購入・着用により学科・専攻の特徴がみられた。しかし観察法では整容面の組み合わせ・色に自分らしさを現すより共通の特徴である同質性が現れていた。デビット・リースマン⁸⁾が「他人（外部）指向型」人間の増加を指摘しているように周囲の者と同じような服装の中にいることによって安心感を得ようとしている姿には、精神的自立をしていないことを示しているともいえる。これらの結果でもこのことが裏付けられたのではないかと思われる。また、「服装の乱れは心の乱れ」といわれるように衣服生活から捉えて、夢を育む1年生と、落ち着いて将来のことを考え始めた2年生を分析したが、それぞれ学科・専攻による学生気質の違いがよく現れていた。このことから容易に観察できる整容面から捉え分析することは、学生指導、なかでも大学生活を充実させ豊かな人間性を育む指導に活用できるのではないかと思われた。また、学生の表現手法としてのファッション性、快適性、清潔感など衣

服教育を行うことの意義を見出すこともできた。現代のように情報の氾濫する中で生活する上において衣服生活のあり方、またそれを通じた指導が自立の形成に作用していることより、基本的家庭教育の必要性を再認識した。

今後、これらのデータをもとに、更に多角的な視点から分析を行いたいと考えている。また、他の専攻・学科の学生を加えて検討して行きたい。なお本報告は、第49回日本家政学会中国・四国支部研究大会において発表したものである。

終わりに本研究を進めるにあたり、多くの助言ご指導を頂きました本学生生活科学教室の磯部美津子先生に深く感謝申し上げます。また、調査にご協力頂きました短大生、大学生に感謝申し上げます。

文 献

- 1) 佐野千佐・高岡朋子：新入学生の服飾に関する意識の調査研究，北海道女子短期大学研究紀要，12，p1～9（1979）
- 2) 浜野靖子・桧田洋子：専攻別に見る着装意識に関する一考察，愛知女子短期大学紀要，18，p85～96（1985）
- 3) 富田弘美・井上和子：女子大生の衣服の購買行動，東京家政学院大学紀要，37，p241～245（1997）
- 4) 有馬澄子・南林さえ子：女子大生の感性と衣服行動，東横学園女子短期大学紀要，23，p1～12（1988）
- 5) 社団法人 日本衣料管理協会編：衣料の使用実態調査，p40，平成14年2月
- 6) 真嶋佐智子：新レディスファッションの商品知識，ファッション教育社，2000年4月
- 7) 高村是州：スタイリングブック，グラフィック社，2002年3月
- 8) David Riesman：“The Lonely Crowd”，加藤英俊訳『孤独な群集』，みすず書房，1973年3月
- ・中島義明，神山進編：まとう一被服行動の心理学一，人間行動学講座第1巻，p179～181，朝倉書店，1997年9月
- ・神山進：衣服と装身の心理学，p116～123，関西衣生活研究会，平成2年3月

(平成14年10月31日受理)